

所 陵

No. 80

[SENRYO/KANSAI UNIVERSITY MUSEUM REPORT]



ウルユス

● 目 次 ●

鹿角製刀剣装具を巡る憶測	山内 紀嗣	2
樽廻船にまつわる事蹟を追って	西川 卓志	4
東洋民俗博物館の歩み	九十九弓彦	8
鬼界アカホヤ火山灰の年代	山下 大輔	12
国勢調査・失業統計調査廻覧板	佐藤健太郎	14

関西大学博物館

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

Tel. 06-6368-1171 (直通) Fax. 06-6388-9928

<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/>

鹿角製刀剣装具を巡る憶測

山内紀嗣

関西大学博物館の常設展示室には福岡県高上山古墳出土とされる鹿角製の刀剣装具が展示されている。「重要美術品」と書かれているから戦前の指定とわかる。資料は関西大学博物館の基礎となった本山彦一氏の資料であり、『本山考古室要録』に掲載されている（末永1935）。1973年発行の『考古学資料図鑑』（関西大学文学部1973）にはこの3点の写真が掲載されており、駒井功氏が解説文を書かれている。その当時は3点とも高上山古墳出土品とされていた。さらに1998年発行の『博物館資料』（関西大学博物館1998）には『考古学資料図鑑』の文章が再掲され実測図も掲載されている。図1はこれによる。2010年になり、井上^{さや}一樹^お氏がこれらの資料の検討を行い、鞘尻は奈良市墓山1号墳出土であることを確認している（井上2010）。高上山古墳は現在、どの古墳なのかはまだ不明である。

1は鞘尻である。長さ5.1cm。側面には周囲を2回転するように直弧紋が線刻される。端面にはこれも線刻された紋様があり、赤彩される。

鞘尻は二枚合わせの鞘木をとめるキャップの役目でもあった。端面の形状は背と腹が上下対称形にならず倒卵形であることから、刀の鞘尻であったことがわかる。紋様については井上氏が詳細に分析している。また、1は井上氏が調べているように奈良市円照寺墓山1号墳出土のものであることが判明している。

2は柄であるが実用の装具としては小型であり、刀子の柄と考える。残存長8.9cm。柄頭側面の紋様についてはこれも井上氏が詳細に検討しているが、やや簡略化されたものである。これにも赤彩が残る。一般に、5世紀の鹿角製刀装具は柄頭と柄縁が鹿角であつても柄間^{つかあい}は木製であることが多いが、これは小型であるためか一本の角から作られている。柄頭端面は上下に断面V字形の溝を設け、腹側を切り欠いて段を設ける。この溝と段は正しい鹿角製柄の製作法である。しかし、本来ならこの溝と直行する溝もあるべきだが、それは省略されている。

3は柄縁である。鹿角の又部を用いて製作されたもので、両側面には元の自然面があり、赤

彩される。長さ7.8cm。側面には部分的に立体的な直弧紋が残る。柄縁は側面から見て広がる側に段がありやや突出するが、この段に鞘木が被さり、鞘木も柄縁と対応するように広がる鞘縁があつたであろう。狭くなる側には柄木が続くことになる。また、柄縁の1方に突起部があつたはずであるがこれは欠失している。しかし、突出部があつた端面が平坦になっているところから、別材の鹿角を組み



写真 鹿角製刀剣装具
(関西大学博物館1998)

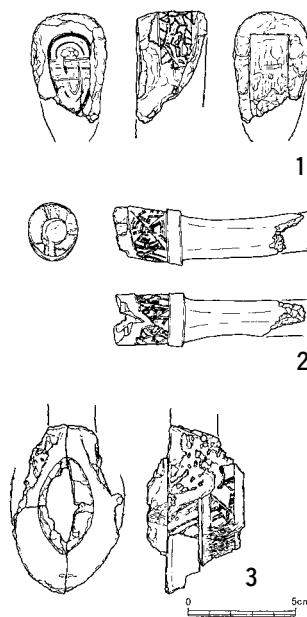


図1 鹿角製刀剣装具
(関西大学博物館1998を改変)

合わせた突起部であったとわかる。5世紀代の典型的な剣装具である。

2・3のような鹿角製刀剣装具はどのような経過を経て生み出されたのであろうか。古墳時代の刀剣装具は基本的に木製だが、鹿角製の装具は古墳時代中期の剣に特有なものである。鹿角製装具は朝鮮半島南部では倭系の人たちと関わりのある墓から出土することはあっても半島に系譜が辿れるものではない。そうすると日本列島内で生み出されたものと考えざるを得ない。

鹿角という材質による性質から出土例は多くない。古い鹿角製剣装具は弥生時代の東日本にある。群馬県新保田中村前遺跡では中期後半のものがある。さらに神奈川県池子遺跡、同県三殿台遺跡、静岡県登呂遺跡など後期の遺跡の出土例がある。これは古墳時代の鹿角製剣装具が柄頭・柄間・柄縁の3部構成であるのと異なり、柄頭から柄縁まで1本の鹿角である。しかし、弥生時代の1本作りの柄が古墳時代の鹿角製剣装具の起源と考えざるを得ない。

弥生時代後期から末期には『三国志』魏書東夷伝倭人の条にみられる邪馬台国、それと対峙する東国（狗奴国）との戦いがあったらしい。邪馬台国があったとすれば、それは現在の奈良

県である可能性が高い。それは当時の王墓が大和に集中していることなどからもわかる。弥生時代末期から古墳時代初頭の頃の戦闘の様子は不明であるが、弓矢以外の接近戦では当然、剣も使用されたであろう。邪馬台国側の武器では木製装具の鉄製の刀剣に木製の装具であったろうが、狗奴国側には鹿角製の剣装具も使用されたと想定できる。

最近、奈良県桜井市纏向遺跡の第195次調査で流路中から鹿角製の1材作りの剣の柄が出土した（飯塚健太氏のご配慮により拝見する。未報告）。ここからは木製の刀剣装具も出土しており、武器の工房もあったと考えられる。流路の時期は纏向3式期であるらしい。纏向3式期は実年代に異論はあるがおおむね3世紀半ばから後半に相当するという。そうすると女王卑弥呼が死亡してからになる。この時期は狗奴国との戦闘はおさまっているはずである。その頃には邪馬台国まで東国の剣が伝わり東国風の剣も製作されるようになったのであろう。

しかし、このような弥生系の鹿角製剣装具が5世紀代の組み合わせ式剣装具に発展した経緯は不明である。柄縁の突起はよく似るが柄頭の形状は新たに創出されたものである。古墳時代前期の刀剣装具についてはまだ不明な点が多い。前期の剣装具の出土例が増加すれば形態の変遷について辿ることができるようになるはずである。この種の剣装具は6世紀末の奈良県藤ノ木古墳頃まで製作される。約700年間も剣装具として使用されたのである。関西大学に所蔵されている鹿角製柄縁は最盛期のすばらしいものの代表例である。

【参考文献】

- 井上一樹 2010「関西大学博物館所蔵鹿角製刀剣装具の直弧紋」『立命館大学考古学論集V』
関西大学文学部 1973「132 鹿角刀装具」『考古学資料図鑑』
関西大学博物館 1998「62 鹿角刀装具」『博物館資料』
末永雅雄 1935『富民協會農業博物館 本山考古室要録』
豊島直博 2004「弥生時代における鉄剣の流通と把の地域性」『考古学雑誌』第88巻第2号

関西大学非常勤講師

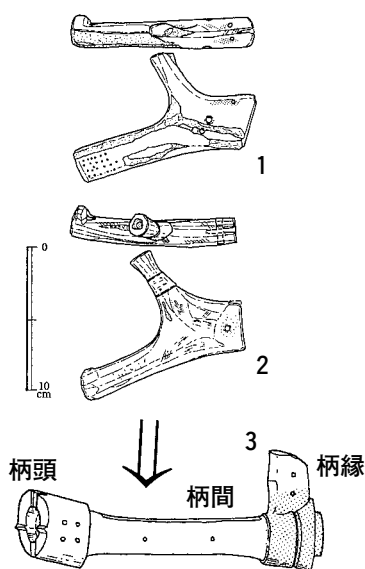


図2 弥生～古墳時代の剣装具

1は新保田中村前遺跡、2は池子遺跡出土鹿角製剣装具。3は古墳時代の模式図、（アミ部分が館蔵のものの相当部分）
（1、2は豊島2004を改変）

樽廻船にまつわる事蹟を追って

西川卓志

はじめに

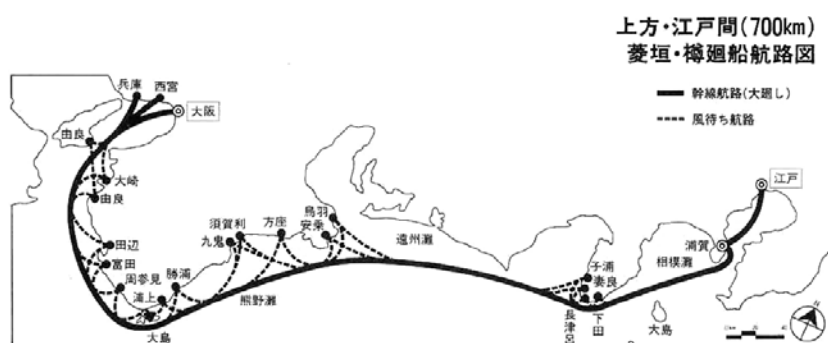
筆者が勤務した西宮市立郷土資料館は、市域の考古資料・民俗資料・古文書等を収集して公開する典型的な地域博物館であった。その設立準備が始まったのが昭和56年度、多くの方々からご指導ご教授を得て地域史に関する情報を整理し、展示計画策定委員会や展示業者との調整を行う日々であった。展示情報の正確さを期すために各地に出向いて調査をさせていただいたものの、時間の関係で既知の情報そのままに頼らざるを得なかったものもあった。特に、市域から遠く隔たった土地に関するものでは、既存情報のみを頼りに作成せざるを得なかった解説パネルもあった。後日を期した裏取り調査と現地確認作業に長年を要したのが、江戸時代の酒荷積み専用船「樽廻船」の航路を示したパネルに関するものである。ここでは、パネルに記載された伊豆半島南端に所在する風待ち港を訪れる機会があったので、記して現地確認の一略報としたい。

1 樽廻船の航海

江戸時代以来、西宮が灘五郷の一角を占める銘醸地であることは周知の通りである。その酒荷を積んで西宮・大坂－江戸間を航行したのが樽廻船である。江戸期の千石積みの大型船といえば弁才船、大坂から瀬戸内を西行して日本海をめぐる北前船と、大坂・江戸の各問屋が差配

する樽廻船・菱垣廻船が主要なもので、それぞれに江戸期の遠隔物流を担った。北前船は船頭が積荷を各寄港地で売り捌く地売りを主体とする一方、樽・菱垣両廻船は原則積み込んだ荷物を江戸に搬入することが主体で、船の所有や積荷の搬入と販売、船の運航がそれぞれ問屋仲間として独立するという組織的なものであった。北前船の寄港地には船が運んだ各地の特産品が見出されて文化交流の研究対象ともなるが、樽・菱垣両廻船に関するそのような痕跡が乏しいのは、この運航、運営形態の差異による。

郷土資料館常設展示室には廻船の航路を図示したパネル（第1図）がある。江戸へ向けて出帆した廻船は、通常紀伊半島を巡って鳥羽を目指す。途中で暴風雨に遭遇した場合には、一時避難や風待ちのため港に逃げ込む。半島を半周すると危険海域の熊野灘に出る。現在でも尾鷲市一带は東南方向から風が吹き付ける暴風雨地帯で、須賀利町周辺には江戸期の難船関連の史料が多く残る。ここからリアス式海岸で知られる的矢湾一帯を過ぎて鳥羽港に至る。多くの廻船がここに寄港する。その理由は、ここより東は伊豆半島まで砂浜海岸が連続して風待ち港がない。鳥羽で日和（天候）を見誤れば途中で戻るか、荒れ狂う海で難儀をすることになる。鳥羽で英気を養った後にしっかり日和見をし、沖乗りをして伊豆半島を通過して船番所（下田、後に浦賀）で船切符を確認後、一気に江戸へと向かう。上方から江戸への航海は通常では10日以上、江戸到着の順位を競う「新酒番船」の時には2.5日という最短記録もある。積荷優先で時間を競う航海は、独特の船体や操船技術、海難保障の制度を育んだ。この実務的に完成された運営体系の中では、文書として残る業務記録以外の史資料はなかなか生まれそうにない。



第1図 上方・江戸間菱垣・樽廻船航路図

2 廻船問屋にまつわる事蹟

それでも樽廻船の廻船問屋や酒荷積問屋の事蹟が全くないというわけではない。廻船の安全な航行を願ったことを物語る事蹟をいくつか見ることができる。

鳥羽周辺の日和山 廻船の安全な航行で樽廻船問屋が重視したのは、熊野灘から志摩地域のリアス式海岸沿い、特に鳥羽港とその周辺であった。そこには樽廻船問屋の名を記した石造品が数カ所確認でき、郷土資料館でも過去に調査を実施したことがある。よく知られたものでは、鳥羽日和山に据えられた方角石がある。日和山とは全国の漁港直近にある眺望のきく小山や高台で、出漁に際して天候を見定める見晴台である。多くの漁村に通有で、雲行きや海面の状況に目を凝らして天候を予想し、漁師は海に出た。日和を見ることも漁師の腕である。この日和山の眺望台に方位を記した盤面を持つ方角石を据えた事例がある。江戸時代のものではこの盤面に十二支を用いて方角が記され、「子」が北を示す。順に「卯」が東、「午」が南、「酉」が西となる。方位を合わせて地面に設置され、雲の流れや風向きを観察して天候の変化を予想した。鳥羽日和山には他の事例と比較しても大形のものが知られる。それは花コウ岩製の八角柱で、上面には円形の台を削りだして十二支と磁針を刻む。側面には、「摂州灘 樽廻船中」、「文政五年壬午二月 石工平吉」と刻まれる。リアス式海岸に沿って南側、的矢湾周辺にもいくつかの日和山があり方角石がある事例も多い。その形状はやや簡素で円柱形、同様に上面には十二支を用いた方角表示及び、「文政五年 灘廻船中」の陰刻がある。日和山も方角石も第一義的には地元の漁師や船舶に関連するものであるが、この地域のものには「灘」や「樽廻船中」と刻まれ、樽廻船に関連したものであることが明白である。鳥羽日和山のそれは御影石を用いて上方で製作されて搬入された可能性が高い。

正福寺の常夜燈 同じように上方で製作されて運ばれた事例として、的矢湾からさほど遠くない青峰山正福寺楼門前の常夜燈がある。正福寺は、青峰山山上に位置する真宗の古刹で、本尊は十一面観音菩薩像である。所在地は、三重県鳥羽市松尾町。付近にある巨岩が東方の海上から目印となり、沖を航行する船舶や、沿岸で暮

らす海女からの崇敬を集めてきた。その壮大な楼門前に常夜燈がある。基礎の石組みの基底から約7mの高さがあり、本体は花コウ岩製である。竿部には「海上安全 天保八丁酉年五月」、台の部分には段ごとに「大坂 西宮」、「樽船問屋中」と刻む。これについては本寺に文書が残され、近郊の磯部の浜から陸揚げされて奉納されたことがわかる。その際に常夜燈の燈火料もあわせて納められた。

龍田大社の常夜燈 廻船問屋が大形の常夜燈を奉納した事例は他にもある。その場所は奈良県龍田大社（龍田本宮）である。大社の所在地は生駒郡三郷町立野。廻船の安全確実な運航を左右する「風」にまつわる神社で、奈良盆地を抜けていく風の通り道に祀られた。筆者は本事例を『西宮町誌』（明治16年刊行 大正15年復刊）の記述の中に見出した。廻船問屋による江戸－上方間の千石積み廻船の運行は明治時代初年に衰微したので、記載の内容は町誌刊行当初の頃に残されていた樽廻船の運航の様子を簡潔にまとめたものである。その中にあった「・・・大和龍田神社に灯籠を献ず・・・」という記載を頼りに現地を確認したものである。

現在境内には関連すると思われる常夜燈が3基ある。境内入口の鳥居脇左右に2基、拝殿前の階段横に1基で、いずれも花コウ岩製、地面からの高さ約3.5mを測る。鳥居脇の2基は天保3年（1832）の建立で、祈願内容は「海上安全」、基壇正面側に上から「江戸廻酒諸荷物 積問屋



第2図 龍田大社常夜燈

仲間」と記す。向かって左側は基壇側面に「西宮」、右側には「大坂」とある。酒諸荷物問屋とは「江戸積諸荷物廻船問屋」とも「江戸酒積問屋」とも記される樽廻船問屋のことで、大坂と西宮にそれぞれ認可された廻船仲間が天保期に奉納したものであることがわかる。

3 豆州の風待ち港へ

伊豆半島周辺は魚資源に恵まれた豊穡の海で

ある。東廻り航路の大型船に限らず小形の漁船や地廻りの船舶も行き交う。年貢米や御城米を運ぶ公用船の出入りもあり、港の利用者は一様ではない。そのような中で、樽廻船問屋や上方文化の痕跡を探してみた。

豆州下田港 伊豆半島南端は上方関西方面からは遠隔地であるが、千石積みの廻船には馴染みの地である。江戸時代前期には船番所が置かれた下田港や、先述の航路図に示された風待ち港の「妻良」、「子浦」、「長津呂」などがある。志州鳥羽から七十五里を無事乗り切った船頭や水主たちが一息つく休憩場所でもあり、天候が悪化する時には風待ちして天候の回復を待つ「風待ち港」でもある。



第3図 下田妙見宮常夜燈

下田は元和2年(1616)に遠見番所が置かれて以後、享保5年(1720)に同様の機能が浦賀に移るまで、海上の関所として機能した。その後もその立地と湾の形状が幸いし、船舶の停泊地として重宝された。上方から江戸へ下る廻船にとっては、伊豆半島先端を回ってすぐ、船を迎え入れるかのように湾口が開く。無理な操船をすることなく入港できる。当初の船番所は外洋に接した須崎に置かれたが、後に湾入り口の手前の大浦に移った。懐の深い湾内は暴風を避ける良港として大型・中型廻船の停泊地ともなり、東側には日和山も所在する。この湾入口の下田市三丁目の浜に妙見神社がある。小規模な社殿を構える御宮であるが、北側の湾内に向かって2基の常夜燈がある。紀年銘があって造立は明治8年(1875)、向かって右側には「摂津國 樽廻船」、左側には「摂津國 酒造組」と刻まれる。2基ともに花コウ岩製で、地元産石材による石塔類が優越する本地域にあって、その形状やデザインも含めて上方からの搬入品を思わせる。下田一帯は江戸時代の安政期に大津波で一度壊滅状態に陥っているこ



第4図 伊豆半島地形図(一部加筆)

とを考えると、千石船全盛期に建てられた先代があったのではないかと思いたくなる。

妻良と子浦の港 伊豆半島を南から西側に回り込むあたりに、風待ち港が多い。大型廻船の航路に近接することと、切り立って複雑な海岸線が連続する地理的な特性が影響している。志州鳥羽で風待ちをした後、一気に難所を乗り切った航海が一段落する廻船にとっては、江戸まで航行する直前の休憩場所としても絶好である。さらに、駿河湾内を行き来する中小の廻船が利用する港としても重宝された。樽廻船と縁の深



第5図 妻良漁港周辺地形図(一部加筆)

い当該地付近の港としては、第1図の通り「子浦」、「妻良」、「長津呂」(石廊)がある。なかでも、子浦と妻良は風待ち港の典型例である。現在では、全体として妻良(漁)港と呼ばれ、子浦はその中の子浦地区として包括されている。地理的には湾口が駿河湾から外洋に向かっ

て開け、湾内は子浦側と妻良側の二つに分かれる。無理な操船を必要とせず、西北、西南の双方向から湾内へ直線的に出入りができる。これも風待ち港として優良な理由である。新酒の季節に吹きすさぶ強い北西風による航海の難儀をここで避けた。湾内の北側に子浦港が、南側に妻良港がある。

子浦は湾内北側の海岸沿にあり、やや東西方向に長く二つの地区に分かれる。江戸期には東子浦、西子浦として双方にそれぞれ名主が置かれた。村落調査ではそれぞれに寺院と神社があり、墓地や主要な祭礼もそれぞれに異なることから異なる民俗空間を持つようである。西子浦の八幡神社に対して東子浦側には伊鈴川神社があるが、さらに浜側に下った小丘上に「住吉神社」がある。この神社は創建時期が不明であるが、海上安全を願っての建立である。西子浦沖の海上から神社を眺めると、子浦の浜の東西それぞれ



第6図 子浦 住吉神社近景（中央樹林脇に鳥居）

れを限る「松ヶ下」と「白埼」の岬間の中央に位置し、浜の正面奥に祀られて象徴的である。

子浦側の日和山は西子浦の西側急斜面を登った上にある。全国の日和山の調査を続けられた南波松太郎氏の記録を参照するなら、日和山及び方角石は後世の改変を受けたようである。繁茂した樹木がなければ、湾内はもちろん外海西側から南側への眺望は素晴らしいが、日和山周辺は近代に入って軍関係の施設が置かれ、明治8年（1875）に設置の方角石も損傷を受けて倒立し、さらに改刻が見られる、という。南波氏は『いつにき』（文政5年刊行）という文献に方角石の記載があることから、子浦日和山には江戸期に遡る先代の方角石があったとされる。その後の確認では個人宅に現存するらしい。

妻良側の日和山にも方角石が現存する。そこへは妻良漁港から直接には登られず、国道136

号から外れてハイキングコースを辿り、途中から夫婦岬への標識を頼りに海側へ藪を分け入ることになる。妻良港入口を眼下に見下ろす尾根のピーク、標高約107mあたりの数m四方の平坦面北側に方角石が置かれる。その平面形は円形で二段、基底部で直径29cm、上段で15.5cmを測り、石材は伊豆石かと思われる。写真のとおり文字と方角が刻まれるがその周囲を石材片と



第7図 妻良日和山方角石

モルタルで補強され、設置当初の様子及び設置時期は不明である。また、方角石から約5.5m南側に石碑がある。簡易な基壇上に高さ約89cm、厚み約20cmの盤面に、「風之神 日和山」と刻む。この場所が日和見をする実務的な場所と同時に、いつの頃からか安全を祈る場所となった。

4 まとめ

幕府天領から年貢米を津出しする船は主に妻良港側、上方からの廻船は子浦港側に停泊した。そのため、子浦側には廻船問屋とそれぞれに関係の深い多くの船宿があった。先述の『いつにき』には、子浦にあった「御影屋」が日和見に定評があったと記される。同様の船宿に関する記録は下田側にもあり、廻船問屋と現地の船宿との連絡は頻繁に行われた。

現地は重なる火災や津波で多くの事蹟が今に残るというわけではないが、いくつかは見いだすことができる。今回も訪れることができなかった「風待ち港」への訪問を期して筆を擱く。

参考文献

- 南波松太郎 1984「Ⅲ 日和山」『船・地図・日和山』南波松太郎先生文集出版実行委員会編集
- 安田尚央他 2013「生業に着目した集落の環境認識に関する研究」『景観・デザイン研究講演集』9

関西大学非常勤講師

東洋民俗博物館の歩み

九十九 弓 彦

はじめに

私が運営する東洋民俗博物館は、1928（昭和3）年開設以来、わが母校の関西大学や奈良県下の諸館園と様々な交流があった。そこで、東洋民俗博物館の92年の歴史や主な展示品の紹介とともにその関係について紹介する。



写真1 東洋民俗博物館

設立の経緯

私の父九十九豊勝（1894～1998）は、早稲田大学在学中に、来日したシカゴ大学の人類学者フレデリック・スタール博士の通訳となったことから、民俗学に興味を持ち、国内外の民俗資料の収集を続けていた。

一方、当時の大阪電気軌道（後の近畿日本鉄道）は、1925年に奈良線の沿線開発事業として奈良市あやめ池に遊園地を開園し、1年後に市川右太衛門の映画撮影所を開設している。

大阪電気軌道は、さらに遊園地周辺に博物館を設けることを企画し、1928年5月、奈良線敷設の事故者慰霊を契機として交流があった九十九豊勝の収集資料を展示する東洋民俗博物館を建設した。今の東洋民俗博物館があやめ池遊園地の一角に創設することができたのは、近畿日本鉄道の招致があったからである。橿原市

にあった考古館と合わせたパンフレットも発行されている。



写真2 九十九豊勝初代館長

本館の建物

博物館の本館は、池を見下ろす丘陵地に建設された洒落た洋風の館で、翼を広げたように左右に展示室が伸びている。中央の玄関の両脇はステンドグラスで、図柄は若い女性の足をあしらったモダンなつくりとなっている。天井は、天候によって開け閉めできる回転式の強化ガラスがはめられている。この強化ガラスの天井は第一室戸台風で壊れ、現在はブルーのベスト屋根に変わっている。

特徴のある本館建物は、2013（平成25）年、奈良県教育委員会文化財課と奈良市教育委員会文化財課が調査した。その結果、奈良の近代化建築物遺産として優れていて、周辺の景観にもよく調和していると評価をし、その年に県立図書館情報センターで近代化建築物遺産のパネル展を開いたことがあった。

財団法人化

東洋民俗博物館の設立から20年近くたった1950（昭和25）年ごろ、東洋民俗博物館は菖蒲池遊園地から独立することとなり、その後の資料



表



裏

写真3 東洋民俗博物館と橿原考古館のパフレット



表



裏

写真4 入場券

の散逸を防ぐために有識者の間で財団法人化への取り組みが始まった。中心になったのは、九十九豊勝の三男の千萬樹で、関西大学文学部と大学院を卒業し、奈良学芸大学で英語の教授をしていた。在学中に関西大学で博物館学課程を履修して学芸員の資格も有していた。当時徳島県庁に勤務していた次男の不二磨らも協力して1953（昭和28）年3月、財団法人の設立を文部省から認可された。

九十九千萬樹は財団法人の設立趣意書に次のように記した。

「人類史上、空前の破壊と絶望の荒れ地より、遅しく萌え伸びる若芽にも似た人々の魂は、この卑近な民俗資料によって人類の営みを再発見する。然して東洋民俗博物館は資料の収集、保管、展示と相まって社会教育の機能を果たすと確信する。」

理事長には三男の九十九千萬樹が就任した。

理事は、九十九豊勝の知人であり、千萬樹の恩師の関西大学教授、末永雅雄博士をはじめ、帝塚山短期大学の水木直箭教授、奈良女子大学の三鼓恵藏教授、高田高校の笹谷良造教諭、奈良学芸大学の長屋謙三教授、近畿大学の中前史郎教授、豊勝の妻で相愛女子短期大学の九十九たか教授。監事には、奈良学芸大学の横田利平教授と阿部孫四郎教授。顧問として、京都女子大学の江馬務教授、田幡病院長の田幡文夫医学博士、第三高等学校のP.D. パーキンス教授、近鉄の上野克己部長ら各界の人たちに依頼し、承諾された。

理事会は館長の九十九豊勝の意向を反映して、おおむね、趣味人の集まりのようなサロンの雰囲気だった。ところが、末永雅雄博士が発掘現場から理事会に駆けつけて話の輪に入ると、一気にアカデミックになり、場の雰囲気が引き締まったと初代館長の九十九豊勝は述懐していた。

その後、理事長には、三男の千萬樹のあとを継いだ四男の九十九弓彦が1983（昭和58）年に就任して現在に至る。弓彦も、関西大学出身で博物館学課程を履修し学芸員の資格を取得した。末永雅雄教授の考古学の講座を夜の天六校舎で受講したほか、博物館実習で上野の東京国立博物館の見学、奈良の新沢千塚古墳群の発掘調査も体験した。今考えると素晴らしい教授や環境に恵まれていたことに改めて感謝している。

東洋民俗博物館の展示物

東洋民俗博物館の展示物は、裏書がないものがほとんどで、どのようにして蒐集されたか不



写真5 開館当時の館内



写真6 開館当時のガラス屋根

明であるが、大半は、1928年に博物館がオープンした時のもので、初代館長の九十九豊勝が蒐集したものと、博物館のオープンに合わせて、スター博士が全国の愛好家に呼びかけて収集したものがあると思われる。

展示物は、大きく分けて三つに分類される。一つは日本の民俗資料。二つは外国の民俗資料。三つは森羅万象窟（九十九黄人の研究室）。その数はざっと1万点。展示資料は91年前の開館当時とほとんど変わっていない。展示の仕方や展示物の解説もほぼ当時のままである。学術的な意味があって系統だてて展示しているかどうかは分からないが、専門家によると、開館当時のままの学術的意識を保った展示は、博物館史的・人類学史的に興味が引かれるという。



写真7 展示室風景



写真8 展示室風景



写真9 南洋民族資料の展示

森羅万象窟（九十九黄人の研究室）

初代館長の九十九豊勝は、自らの号を「黄人（おうじん）」と名乗っていた。なぜ黄人か？黄色はイエローだから黄人はイエローマンをもじってエローマンというわけだ。博物館の裏の



写真10 森羅万象窟の書棚

一部屋を「森羅万象窟」とも「奥の院」ともよんで、性崇拜の蒐集や研究、道楽絵はがきや判じ絵作りなどを楽しんだ。

九十九黄人は、「民俗学の究極は性で、人類は性を神秘的なものとして信仰していた」というのが基本的な考え方だった。森羅万象窟には日本や世界で蒐集したグッズ、書籍、雑誌、彫刻、春画、浮世絵などや、イギリスのチャタレー夫人、中国の金瓶梅、インドのカーマストラ、阿部定の尋問調書、カストリ雑誌の「あまとりあ」、宮武外骨の「滑稽新聞」など貴重な書籍が並んでいる。

もう一つの黄人の趣味は、道楽絵はがきと判じ絵作りであった。大正時代から昭和時代初期の趣味人やコレクターは、「高等遊民」と名乗って絵葉書や判じ絵作りを楽しんでいた。この遊びを「我楽多」と称し、文字どおり「我楽しむ」の意味で、価値のないガラクタ（我楽多）を蒐集し、各地の趣味人と競い合ったことで有名であった。

最近の東洋民俗博物館と動きとこれから

私（四男の九十九弓彦）はNHKを定年退職して、故郷の奈良に帰った。少し時間的に余裕ができたので、少しずつ博物館の整理を始めた。雨漏りしていた屋根を修理して青いベスト屋根に変えた。玄関のロータリーと博物館への登り口は、カラーのインターロッキングブロックで補修した。室内の展示方法は、基本的には開館当時と変わらないが、展示物が見にくいところ

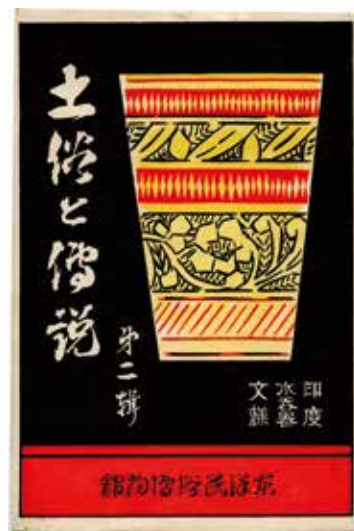


写真11 絵葉書の封筒

は思い切って陳列台を外した。また、絵馬のようなものは博物館の壁面一面に貼り付けて見やすくした。

さらに、朝日新聞、毎日新聞、読売新聞、産経新聞などは奈良県版だけでなく、全国版で何度も特集し、テレビでもNHK、NTV、ABC、KTVなどが色んなコーナーで取り上げてくれるようになった。こうしたマスコミの報道と来館者のツイッターなどの書き込みの影響で、全く宣伝していないのに、入館者は毎年確実に増えてきている。奈良市が主催する「ひとまち大学」の講座では、毎回、募集定員20人に対して70人を超える応募者がある。特に最近では、若い女性グループの入館者が増えて、「性」に対する反応も戦前とは大きく意識が大きく変わってきたようにみえる。

今後の東洋民俗博物館の運営は、開館以来の難しい局面を迎えている。役員の高齢化に伴う後継者の問題をどうするのか。後継者がいない場合には、法人解散、閉館という道を選ばなければならないかもしれない。そうした場合の資料の散逸防止をどうするのかなど懸案が浮上している。

財団法人 東洋民俗博物館

〒631-0032 奈良市あやめ池北1-5-26

TEL: 0742-51-3618

不定期開館: 10:30~16:30

見学には事前予約が必要 入館料: 500円

東洋民俗博物館 理事長

鬼界アカホヤ火山灰の年代

山下大輔

はじめに

「鬼界アカホヤ火山灰」(写真1：以下、アカホヤ火山灰とする)とは、今から約7,300年前(縄文時代早期末)に鬼界カルデラの巨大噴火によって噴出し、西日本を中心として広域にわたって降下・堆積した火山灰である。鬼界カルデラは、九州島の南端からさらに南へ40kmの海底に位置し、東西約20km、南北約17kmにわたる巨大なカルデラで、薩摩硫黄島と竹島がその北縁に相当する。この鬼界カルデラの噴火は、噴煙柱を形成する激しいプリニー式噴火にはじまり、多量の降下軽石や火砕流を噴出した。大規模な火砕流は幸屋火砕流堆積物と呼ばれ、海を渡り薩摩半島および大隅半島の南部にも及んだ。

考古学研究において、火山噴火によって堆積した火山灰をはじめとする堆積物は、遺跡や遺構の年代を推定する上で極めて重要な位置を占める。アカホヤ火山灰が安定して堆積している南九州の遺跡において、この火山灰層は縄文時代の「鍵層」として遺跡の年代を理解する上で、さらには地域を異にする遺跡間の共時性を導き出す際に重要な役割を果たしている。アカホヤ火山灰については、これまでも ^{14}C 年代測定法を用いた研究を中心に、降灰年代の推定がなされてきた。より誤差の少ない正確な年代を推定することは、単に個別の遺跡・遺物に年代的位置づけを与えるだけでなく、空間的に隔てた地域の遺跡を比較検討する際に、大きな手掛かり

となり得る。

そこで小稿では、これまでのアカホヤ火山灰の年代に関する研究を整理することとしたい。

^{14}C 年代測定法による推定年代

1960年代から1970年代前半には、当時「アカホヤ」や「アカボッコ」、「オンジ」などと各地域で呼ばれていた同火山灰層の噴出源は特定されていなかったものの、既に ^{14}C 年代測定法による噴出年代の推定も試みられていた。アカホヤ火山灰層の上位および下位の土壌それぞれの ^{14}C 年代測定値などから、今から約5,000～6,000年前と推定されていた。

1970年代後半に、土壌学や火山学の研究者によってアカホヤ火山灰は鬼界カルデラ起源の広域火山灰であることが明らかにされ、縄文時代研究、特に土器の編年研究において大きな影響を与えた。先にみたように、このアカホヤ火山灰層が安定して確認できる南九州では、これを鍵層とし、その上位を縄文時代前期、下位を縄文時代早期とする時期区分が一般化することとなった。アカホヤ火山灰層の噴出年代についても、さらに関連する ^{14}C 年代測定値が蓄積され、神戸市玉津の海成層中で発見されたアカホヤ火山灰の上下の地層で得られたヒメシラトリガイの測定値などから、 ^{14}C 年代で約6,300年前であるという見解が示された。

上記の測定値については、いずれも暦年較正がなされていない値であった。その後、 ^{14}C 年代測定に高精度のAMS法が盛んに用いられるようになり、1990年代も後半になると ^{14}C 年代測定値の暦年較正に関する議論が活発化することとなった。大気中の ^{14}C 濃度は、過去一定ではなく経年変化があることなどから、 ^{14}C 年代測定値と実際の暦年代には誤差が認められる。これを実際の年代に変換するためには較正が必要となり、較正を経た値は較正暦年代と呼ばれ、cal BP や cal BC と表記される。現在では、後にみる水月湖の年縞の研究成果とも併せ、 ^{14}C



写真1 アカホヤ火山灰(写真上部のオレンジ色の層)の堆積状況

年代測定値で6,500 BP、較正暦年代が7,300 cal BP という値が妥当であると考えられている(栞畑2016)。

年縞年代法による推定年代

年縞とは、季節ごとに異なるものが堆積することにより形成された明暗1対の薄層(縞)で、この1対の縞が1年に相当するものである。この縞を1枚ずつカウントしていくことで、それが何年前の縞であるかがわかる。

2006年、福井県若狭町三方五湖の水月湖において行われたボーリング調査によって、水深34mの湖底で45mにわたり完全に連続する年縞堆積物の採取に成功した。これにより、現在から約7万年前までについて限りなく暦年代に近い時間軸を得ることができるようになった。

2018年9月には三方湖に面した縄文ロマンパーク内に「福井県年縞博物館」(写真2)がオープンした。館内の常設展示では、この45mにわたる7万年分の実物の年縞をステンドグラスにして展示している(写真3)。来館者は45mのステンドグラスとなった年縞を観察しつつ歩を進めることで、7万年の時をさかのぼること



写真2 福井県年縞博物館の外観



写真3 常設展示の年縞ステンドグラス

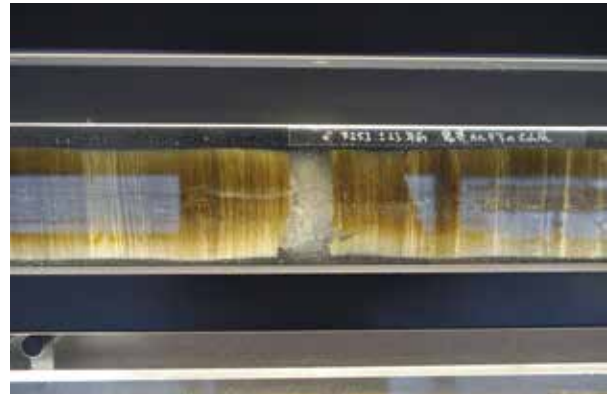


写真4 年縞中のアカホヤ火山灰

ができる。起点から約10mの地点にはアカホヤ火山灰の堆積が確認でき、 $7,253 \pm 23$ 年前という年代値が与えられていることがわかる(写真4)。この年代は、先にも触れたように、これまでに得られている ^{14}C 年代測定値とその較正暦年代とも大きな乖離はない。しかも、この水月湖で得られた縞数えによる推定年代は、5万年前で約170年の誤差しかなく、極めて正確な時間軸を与えてくれるものである。

おわりに

アカホヤ火山灰は、西日本を中心に広範囲にわたって堆積が確認できる広域火山灰である。そのため、この火山灰層が確認できる地域では、これを鍵層として、詳細に出土遺構や遺物を検討することで広域編年が可能となる。より誤差の少ない範囲で降灰年代を推定することが可能であれば、アカホヤ火山灰の堆積が認められない地域であっても、年代値の得られている遺構・遺物との比較によって遺跡間の共時性を導き出すことが可能となろう。

遺構・遺物の編年学的手法はもちろん、理化学的な方法も駆使し、双方向的に検証しつつ考古学的事象に時間軸上の位置づけを与える作業が求められる。

【参考文献】

栞畑光博 2016『超巨大噴火が人類に与えた影響—西南日本で起こった鬼界アカホヤ噴火を中心として—』雄山閣

【写真出典】

写真1～4：筆者撮影

関西大学博物館学芸員

国勢調査・失業統計調査廻覧板

佐藤 健太郎

はじめに

2019年度に本学の理事を務めた学友の故徳山喜昭氏蒐集の資料（以下、徳山喜昭コレクション）が徳山多美氏より寄贈された。徳山喜昭コレクションは展示会で利用するとともに、順次整理を進めている。「国勢調査・失業統計調査廻覧板」は整理の過程で見つかったものであり、以下本品について紹介する。

1. 本品の寸法及び重量

寸法は縦48.7cm×横29.4cm×厚さ2.2cmで、重量は1.46kgである。上部木口に孔3か所、両面を貫通する孔1か所がある。上下の木口に傷みと木表に円形状の染みが確認されるが、これらは二次利用の際のものとみられる。

両面には、次の文字がある。右側に「国勢調査 国民生活ノ實況ヲ明ニシテ／政治ノ基礎ヲ作ルタメノ人口／調査デアリマス」（／は改行を示す）、左側に「失業統計調査 失業問題解

決ニ重要ナル資料ヲ得ル爲ニ有業者／ト失業者トヲ調べルデアリマス」と書かれている。その下に「此の板は御面倒なから直ぐ／讀で直ぐお隣へ御廻してください」、赤線をはさんでその下に「東京市役所」とある。中央の縦39cm×横10cmの区画が赤色に着色され、「〈大正／十四年〉十月一日」（〈 〉は双行を示す）の文字が抜かれている。なお木表の左側の木端に「大正十四年十月一日」との墨書がある。木材はスギで、板目を使用し、面取りが丁寧になされている。

2. 国勢調査と失業統計調査

本品は1925年（大正14）10月1日実施の国勢調査と失業統計調査に関わるものである。国勢調査とは人口の悉皆調査で、第1回国勢調査は1920年（大正9）に実施された。当初、国勢調査は10年毎に実施するとされたが、それでは人口変動の実態を把握するのに不十分であり、行

上部木口



木端
(墨書箇所)



木表



木裏

政・経済上の基礎資料を得るために、大規模調査と簡易調査を5年毎に交互に実施することに改められ、1925年（大正14）に第2回国勢調査が簡易調査で実施された。

一方の失業統計調査は、当時の戦後不況と深く関わっている。第1次世界大戦の戦時景気にわいた日本は、大戦終結後にはその反動をうけて慢性的な不景気に陥り、企業倒産などによって多くの失業者（雇用機会を失った者）が生まれ、社会問題となっていた。本品によれば、失業統計調査は「失業問題解決」の前提の実情把握のための資料として、有業者と失業者の数の調査であった。先の国勢調査が全国で行われるのに対し、工業都市21か所（札幌市、東京市、京都市、大阪市、堺市、横浜市、横須賀市、神戸市、名古屋市、長崎市、佐世保市、名古屋市、浜松市、仙台市、金沢市、岡山市、広島市、呉市、和歌山市、門司市、八幡市）と鉱山所在地3か所（夕張町、足尾町、大牟田市）に限られて実施された。

本調査が以上の地域で実施されたのは多くの失業者がいて、申告書の配布と回収が円滑に実施できると想定されたためとみられている。目的や実施地域が異なるにも関わらず、失業統計調査が国勢調査と併せて実施された理由は、経費と調査手続などの軽減のためであったという。

3. 本品の特徴

調査の数値を正確なものにするには、国民に告知し、積極的に参加させることが重要である。そのため様々な方法で宣伝が行われ、大阪市では、講演会、活動写真、宣伝ビラ、ポスター、ラジオ、新聞などが用いられた。

東京市でも、新聞や宣伝ビラや宣伝講演会が用いられている。江戸東京博物館にはその宣伝ビラが所蔵されており、表面には国勢調査と失業統計調査の実施日・目的、裏面には練習用の失業統計調査の申告書が印刷されている。興味深いのは、表面の中央に赤地に白抜きで「大正十四年十月一日〈失業統計調査／国勢調査〉ハ同時ニ行ハレマス〈東京市役所／東京府〉」と印刷されている点で、意匠が本品と類似している。目的の文言にも共通点がある。

本品は、東京市で両調査の実施を宣伝するために作られたものとみられる。その特徴は、ビラのように配布されるのではなく、家から家へ

と回るという点である。つまり、縦48.7cm×横29.4cm×厚さ2.2cm、重量1.46kgの板を家の者が一度は確実に手に持つことになる。廻覧板の大きさ・重さを通して、受け取った者やその家庭に両調査の実施を印象づける効果をねらったものと思われる。本品の両端が他の部分に比べて黒ずんでいるのは、人々が手にとっていた証左であろう。

最後に両面に文字があることを考えてみたい。各家庭を回るものであれば、片面にのみ文字が書かれていれば十分であるが、本品には両面に文字が書かれている。このことと上部の孔とを併せて考えてみると、両面に文字や絵が描かれる吊り看板のように、回覧後に本品は吊り下げられたのではないだろうか。したがって上部に残る孔は、当時に施されたものと思われる。

おわりに

本調査の方法は、調査員が担当区域内の全戸に対し、雇用者と失業者がいるかないかを聞いて回り、該当者分の申告書を渡して自計方式で回答を求めるもので、本調査を円滑に行うためには、事前に人々への宣伝と周知が重要であった。本品もその宣伝と周知のために作られたものである。

なお報告書によると、本調査の対象者は2,355,015名となり、失業者数は105,612名、失業率は4.48%であった。「失業」の定義をかなり狭めたこともあり、この失業者数や失業率は当時の実感とかけ離れたものとなり、予想外のものと受け止められた。

【謝辞】

統計資料館の皆様にご助言を賜りました。改めて御礼を申し上げます。

【参考文献】

江戸東京博物館所蔵「ビラ 十月一日失業統計調査・国勢調査ハ同時ニ行ハレマス」（資料番号18200173）。
大阪市社会部調査課「大阪市に於ける失業統計調査」（『労働調査報告』41、1925年）。
加瀬和俊「失業対策史研究を振り返る」（『大原社会問題研究所雑誌』707・708、2017年）
内閣統計局編『失業統計調査報告』1・2、1926年。

関西大学博物館学芸員

◆ 博物館だより

◇かんさい・大学ミュージアムネットワークの取り組みとして、連携展示会「関西大学博物館の名品」を9月2日から20日まで開催し、会期中には144名の方にご来場いただきました。また、連携講座「蓄音機で聴くSPレコードコンサート 音楽とのつながり」を10月4日に関西大学東京センターにて開催しました。参加された60名の皆さまは、ポピュラー音楽からクラシック音楽まで幅広い音楽とともに、ゼンマイ駆動の蓄音機が奏でる音色の広がりを楽しんでいました。その他にも「大学建築をさぐるバスツアー」(10月19日 参加者26名)と上方文化体験講座「小袖と邦楽」(10月25日 参加者71名)を実施しました。

◇2019年度ミュージアム講座「『かたな』についてのいろいろ」を開講し、54名の方から聴講の申込みをいただきました。10月12日の第1回目は台風の影響で残念ながら中止となりましたが、第2回、第3回の講演会ではたくさんの方にご参加いただきました。

第1回 10月12日 台風のため中止。

第2回 10月19日「現代刀匠として日本刀を鍛える」 刀匠 高見國一

第3回 10月26日「藤ノ木古墳出土の原「^{たまき}纏太刀」をめぐる諸問題

名古屋市教育委員会文化財保護室 深谷淳



◇今年度も「博物館実習展」を11月10日から15日まで開催しました。この展示会は、企画から展示まで学生自らが主体的に取り組みます。今年度は32名の実習生が「稲垣足穂展～イナガキタルホ×∞～」、「たけがたり～今日/京に生きる竹工芸～」、「吹田くわいの今と昔～近世から近代、そして現代へ～」の3班に分かれ、博物館学課程の集大成として展示を構成しました。また、2019年度特別展示として「徳山喜昭コレクション 看板一商いの武器なりー」を同時開催し、会期中には508名の方にご覧いただきました。

◇12月7日に「DOCOMOMO Japan 関西大学千里山キャンパスにおける村野藤吾建物流 選定記念シンポジウム」を開催しました。当日はキャンパス見学ツアーも開催し、見学ツアー参加者121名、シンポジウム参加者187名と、たくさんの方にお越しいただきました。

◇2019年度冬季テーマ展として、2020年1月14日から30日まで「関西大学と村野藤吾 建築写真・設計図」を、冬季ミニテーマ展として「装飾塼—レンガに見る中国の祈りと美—」「本山彦一と九州—故郷での交流と蒐集資料—」「絵馬—祈りの表象—」を同時開催し、来館者は224名でした。

◇このたび本学化学生命工学部教授、副学長の吉田宗弘先生から、京都南座の「まねき」を書いておられた書家竹田耕清氏から譲り受けられた書「寿」を寄贈いただきました。また、西谷康夫氏からは、2016年に寄贈いただいた古文書と一体となる古文書2,113点、和漢書257点の合計2,370点を追加寄贈いただきました。今後、博物館で充分活用していきたいと考えています。

．．． 編集後記 ．．．

表紙は、文化9年(1813)頃から昭和時代初頭まで販売された薬「ウルユス」の江戸時代末期から明治時代に作られた木製看板です。効能は「腸を空にする」もしくは「体内の毒を空にする」で、名称は「空」字を3つに分解し、「ス」をつけたものといわれています。

2020年度春季企画展「受贈記念 横山滋ガラスコレクション びいどろギヤマンガラス展—ガラス器を愛で愉しむ—」を4月1日から5月17日まで開催します。本展示会では、横山滋ガラスコレクションの受贈を記念し、近世の和ガラス、和製ギヤマンを筆頭に輸入ガラスや近代のガラスの名品の数々約200点を厳選してお披露目いたします。

